

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	H・E・アリソンによるカント哲学の再解釈
Author(s)	多賀谷, 誠
Citation	HABITUS , 24 : 105 - 121
Issue Date	2020-03-20
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/48945">10.15027/48945</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048945">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048945</a>
Right	
Relation	



# H・E・アリソンによるカント哲学の再解釈

多賀谷 誠

(広島大学大学院文学研究科倫理学専攻)

## はじめに

本稿では、筆者の修士論文「カントの認識論と自由概念：H・E・アリソンの「取り込みテーゼ」によるカント哲学の再解釈」より、アリソン(Henry E. Allison)の超越論的観念論に対する「方法論的二側面解釈」とカントの行為者性に関する主張に前提されている「取り込みテーゼ」解釈の概説及びこれらアリソン説の受容について報告する。アリソンのカント解釈の背景には第二次大戦後のカント研究にあった唯物論的な理解の風潮に対する抵抗と、カント自身の長期にわたる研究を一貫した思想に基づくものとみるカントへの好意的な理解がある。それゆえ、アリソン説の全体がカント自身のテキスト(あるいは思想)に帰せられるかは、それ自体研究の対象たりうる重要な課題であるが、差し当たって本稿ではアリソン説の敷衍に努めようと思う。

## カント哲学の非決定論的、反唯物論的主張

アリソン説の敷衍に先立って、彼のカント研究上の基本方針を確認しておこう。まず、アリソンの主要な著作には1983年『カントの超越論的観念論：解釈と擁護』、1990年『カントの自由論』がある。前者ではカント哲学の前提部にあたる超越論的観念論の二側面解釈が、後者ではカント倫理学の根底にある、傾向性の格率への取り込みテーゼ解釈が主張されている。いずれの解釈も、カントの形而上学に含まれる非決定論的な性質を主題としており、この論点は上掲書二作の間隙を埋める

89年の論文「カントの唯物論反駁」で強調されている。

周知のように、カントは批判哲学を標榜し、時代を席卷していた独断論および懐疑論の哲学とは異なった視点から哲学的問題に取り組むみずからの思想の変遷を「コペルニクスの転回」(BXVI)と称した。カントによれば、近代哲学における合理主義と経験主義の論争は、いずれも思弁的な純粹理性を十分に検討することなく不当に進められたものであり、この抗争は十分な理性批判によってのみ解決される。批判哲学の仕事は、「ア・プリオリな認識の可能性とその普遍的な条件を示す」(VIII226-227)<sup>1)</sup>ことであり、その限りで独断論の形而上学は正当化され(懐疑論の批判を免れつつ)経験主義の要求する合理的説明と矛盾なく調停される。したがって、あらゆる形而上学は理性批判によって課題が解決されるまでは「盲目的な独断論もしくは懐疑論であるという批判からまぬかれてはいなかった」(Ibid.)と、カントは主張している<sup>2)</sup>。カントが超越論的哲学の中心に据えるのは、アリストテレス以来の「われわれの認識はすべて対象にしたがう」という経験主義的な認識論ではなく、「対象こそがわれわれの認識に従わなければならない」(BXVI)とする超越論的観念論(transzendentaler Idealismus)の思想である。簡潔に言えば、超越論的観念論はわれわれに可能な対象の認識を、対象物そのもの(物自体 Ding an sich)ではなく、対象物の表象(Vorstellung)である現象(Erscheinung)に限定する。現象(フェノメナ)と物自体(ヌーメナ)の区別こそがカントが自身の哲学を超越論的と称する由来であり、これに基づく認識論がまさにコペルニクスの転回の本質に相当するのだ。

ところで超越論的観念論では、人間の認識の源泉として「感性による直観のほかには悟性(代表的には思惟の能力)によるもの」(A19/B33)が想定されている。カントによれば、悟性による多様な表象の統一の作用(表象の比較や結合、分離といったはたらき)は対象物(表象)に対する判断(Urteil)と呼ばれ、また「悟性のはたらきのすべては判断に還元される」(B94/A69)。認識能力の規定に際し、感性が時間と

空間を純粹直観として必要としたように、悟性もみずからの能力の射程を定義するために純粹悟性概念(カテゴリー)を必要とする。カテゴリーの証明は演繹によって証明されるが、ここでは省略したい。なお、演繹の眼目はロック・ヒュームらの経験論、懐疑論を克服することであり、「その際カントは、因果性認識の可能性・必然性を経験の地盤で明らかにしようとしている」のであって合理主義者のように独断的にそれらを説明しようとしているわけではない<sup>3)</sup>。カントによれば、ア・プリオリな概念の超越論的演繹は「その概念が、(直観の条件であるか、思惟の条件であるかを問わずに)経験を可能にするア・プリオリな条件でなければならず」、それ故に、「経験を可能にさせるための客観的根拠となりうる概念」、すなわちカテゴリーが要求されるのである(A94/B126)。原因の概念の説明に際して、「原因と結果の総合は、経験的にはまったく表現されえないような尊厳がある」(A91/B124)と言ったのは、カント自身が「自然の因果性を法律の厳格性(同一のケースに同一の条文を適用する)をモデルとしてとらえている」からである<sup>4)</sup>。したがって、カントは客観的妥当性を持ち、「それに基づいて万人が必然的に同一の判断を下しうる自然法則」を含意している。カントにおける自己意識(Selbstbewußtsein)は、悟性の使用である「判断」(先述したように「悟性のはたらきのすべては判断に還元される」(A69/B94))の客観的妥当性をカテゴリーの演繹によって説明した後によく言及される。超越論的哲学の枠組みでは、あらゆる対象の認識は表象としてわれわれに与えられる(B1)。したがって、「われ思う(ich denke)」という意識も、それ自体は思惟のはたらきであるが、この枠組みのうちでは一種の表象として考えられる。しかし、カントによれば、「〈われ思う〉という表象は、私の一切の表象に伴いうるのでなければならない」(B131)、というのも、「さもなければ、私のうちにまったく想定することができないようなものまで表象されることになるだろうし、あるいはこの表象はたんに不可能であるか、少なくとも私にとっては無であるのと同じだろう」(B132)と補足している。さらに、カントは「〈われ思う〉という

表象は[悟性の]自発性の作用 (Actus der Spontaneität) である」と定義し、それ故に「感性に属するものとは見なせず」、「この表象を純粹統覚 (reine Apperzeption) あるいは根源的 (ursprüngliche) 統覚と名づけ、経験的 (empirisch) な統覚から区別」している (Ibid.)。カントが「統覚」と呼ぶ、〈われ思う〉の表象は、経験的にはこの表象を産出する個別的な主観における普遍的な自己意識 (ein allgemeines Selbstbewußtsein) であり、かつ純粹統覚として、すなわち超越論的統覚としては、あらゆる認識の具体的な内容である知覚を統一し、これが「一切の表象に伴う」(B131) という仕方で自己自身を統一する二面性をもっている。

さて、アリソンが「カントの唯物論反駁」で批判したのは、戦後カント研究にあった唯物論的解釈の風潮である。カントは、悟性の認識の作用としての自発性とその性質の自発性(自己活動性)を区別していたものの、「思惟の自発性から統覚の作用を推測し、それらを思惟するもののもつ[非経験的に、したがってア・プリオリに人間の理性に起源をもつ]超越論的自由と同一視していた」が、「転回」を経たカントは、「少なくとも 18 世紀中葉には、この観点を克服し、思惟の作用に含まれる論理的自由と意志の作用に含まれる超越論的自由の厳格な区別を行うようになった」<sup>5)</sup>。第一批判で表明された自発性の厳格な区別と理性批判の態度には、現代における心の理論 (theories of mind) のもとでカント再解釈を行う研究者ら(たとえばセラーズやパトリシア・キッチャー)が共鳴しており、「カントのヌーメノ的な形而上学」を「観念論的科学上の神経生理学的な思惟のはたらき」に置き換えて、「カントの認識論における重要な洞察、とりわけ非経験的なものへの主張」を、「現代的に洗練された唯物論的な心の理論へ」合流させようと試みている<sup>6)</sup>。彼らが強く共鳴し、そのような解釈の根拠として取り上げるのは、「純粹理性の誤謬推理」(A341-A406/B399-432)に含まれる合理的心理学への批判である。カントが合理的心理学と呼び、批判の対象としているのは、直接にはヴォルフが設けた心理学の区分であり、これを 21 世紀の心理学と同一視して扱うことはできないが、唯物論的

なカント解釈者らが目的としているのは、合理的心理学の基本的命題——たとえば、「靈魂(あるいは心や精神)は実体である」「靈魂はその性質から単純(純粹)である」「靈魂によって自己同一性が説明される」など——を、カントの批判によって一刀のもとに切り捨てることである。

アリソンは、カントの主張と解釈者らの説明に同意する一方で、彼らが「カントによる心と心の認識活動の説明の、より不可解で示唆的な側面を極端に軽視するか無視している」点を指摘している<sup>7)</sup>。唯物論反駁の根拠たりうる論点は三つ存在する、第一に解釈上の問題として、カントを唯物論的に捉えることは、(理性にとって同一の価値を持ち、それゆえに結論を下せない命題同士の抗争である)アンチノミー論の方針と真っ向から衝突している。第二に、カントは〈われ思う〉というわずかばかりの確信から、これを「唯一無二の形而上学的原理とすること(合理主義)」を、「思惟一般の論理的解明を客観あるいは対象の形而上学的規定とみなす誤謬である」として「超越論的仮象」(A339/B397, A341-342/B400, B409)と看破するが、合理主義の極端な主張である唯心論とともに「たんなる思考する主観としての「自己」を根拠にして、唯物論的に説明することは不可能である」(B420)と断言した点が無視されている。唯物論的に解釈する現代の研究者らは先述した合理的心理学の批判からカントの「観念論反駁」を引き合いに出すが、彼らが物質主義的側面に入れようとしている自己意識論についてカントは、観念論反駁と同じだけの強さでもってそれどころかそのような解釈が不可能であることを断言しているのである。そして第三に、第一批判の唯物論反駁と密接な関係にある『人倫の形而上学の基礎づけ』の「心はその判断の活動において、因果的に決定されていると理解することは不可能である」(Gr: IV448)<sup>8)</sup>という主張は決定論に対する間接的な根拠として度々引用されているが、唯物論反駁と同じく軽んじられている。とりわけ『基礎づけ』の主張は、現代の唯物論に対しても有効な論点を多く含んでいるものの、自発性と統覚の関係性の理解の難解さと、三批判における定義との矛盾ばかりが問題視

され、唯物論に反対する解釈者たちからも敬遠されてきた。

非経験的、すなわち超越論的な自由の理念のもとで問題を検討する、というカントの主張を決定論者(あるいは唯物論者)はまず受け入れることができず、批判期における定義的な説明はまだしも、カントの思想としてのこの主張は、非哲学的な議論として看過されがちである。しかし、アリソンは『基礎づけ』の主張を、「唯物論者による心や精神の説明に対する、カント主義者のやむをえない応答であり、挑戦でもあった」<sup>9)</sup>と擁護している。

アリソンによれば、『基礎づけ』の主張の擁護に必要な二つの前提がある。まず、カントの主張は批判期から一貫して、感性的存在者の心や精神状態(現代における科学的な術語でいいかえれば、感覚的なクオリア—精神的な側面から)の説明ではなくて、認識の概念的思考に焦点をあてたものだった。したがって一つ目に、唯物論者が思考のプロセスについて因果的説明を持ち出した場合にのみ、カント主義者はそのような説明の代わりに統覚概念を持ち出すか、あるいは「統覚のはたらきはそのように説明できない」と反論するであろうこと、そして二つ目に唯物論の因果的説明はある意味では物理的に卓越したものであり、いいかえれば、「精神的なもの」をも含め物質を、対応する物理的システムの因果的制約と条件に従うものとして扱っていることを了解しなければならない<sup>10)</sup>。

したがって、論点をまとめると、アリソンは「カントを唯物論的に解釈すること」については、「統覚概念は、カント自身が述べるように唯物論的に説明することはできない」と説明する一方で、感性的すなわち物質的な存在者である人間を物理的システムに則って扱う唯物論の立場を否定しているわけではない。カント自身も「人間が外的影響を受ける存在者であること」を認めており、『基礎づけ』の主張で鍵となる枢要な箇所はたんに主観的な原因を決定する「理性は、外的影響から独立した自分自身の原理の創造者と見なさなければならない」という点に終止している。つまるところ、カントが断固として主張するのは、「人間は客観的に正当な

根拠に基づいて判断する能力をもっている」という前提の必要に留まっており、いかえれば、人間は「客観的に妥当な規範原理に従って自分の理性(または悟性)が自分自身を抑止するから、すなわち自律的である」という実践的な結論が帰結する。そしてアリソンが強調するのはこの結論が、カントを唯物論的に解釈した際の、統覚を「因果過程の条件つきの結果としての推論活動の概念」とみなす理解とは相容れないということである。

## アリソンのカント解釈法

### (a). 方法論的二側面解釈

アリソンの解釈の基本的な方針は、カントのテキストとそれに対する批判を対決させること、いわば現在の思想史上の視点から論争を検討することで、カントの主張を論証し好意的に再解釈することである。アリソンは『カントの超越論的観念論：解釈と擁護』において、カントが設けた現象と物自体の超越論的区別に対し、自身の解釈法である「方法論的二側面解釈」を示した。従来のカント研究では、これらの区別に対し、現象界(感性界)と可想界(悟性界)に属する存在者の存在論的な「二世界」あるいは、ある存在者が有する二つの様相についての形而上学的「二側面」に言及する二世界説あるいは形而上学的二側面説が用いられていた。しかし、アリソンが自身の著作で批判するところによると、これらの古くはカントの同時代人にまで見いだされる解釈が、カントの観念論への批判と倫理学に関する主張の多くを惹起している。アリソンが主張するように、超越論的区別を理性的存在者に付与された行為者性の二側面として捉えるならば、第三アンチノミーにおける経験的性格と叡知的性格(あるいは非経験的な可想的性格)の区別は従来扱われていたよりもはるかに穏当な、それどころか現代においても唯物論(決定論)批判として十分通用する理論としてカントの主張を解することが可能になるのだ。この論点を補強するために、アリソンは「カントの唯物論反駁」で、心とその認識活動を「たんな



る思考する主観としての自己を根拠にして、唯物論的に説明することは不可能である」(B420)というカント自身の唯物論反駁を根拠に、統覚のはたらきを「判断があるもの〈として受けとる (taking as)〉はたらき」と定義し、さらに翌年の『カントの自由論』では『純粹理性批判』の経験的な統覚と超越論的(無時間的)統覚の区別(A106-107)を人間に応用したカントの説明を、「理性的行為者性の理論」として再解釈することで、現代的な議論の俎上に載せることに成功した。さらに『カントの自由論』では、カントの唯物論反駁とそこに含まれる超越論的な自発性の作用がカントの諸著作を通底する理論であるとして、カントの「取り込みテーゼ」をまとめている。

### (b). 取り込みテーゼ

方法論的二側面解釈を用いても、あるいは用いるがゆえに惹起される課題もカントの自由論解釈には存在している。それは、ある存在者の「二重の性格を、カントの言葉でいえば、経験的性格と叡知的性格を、単一の主体(理性的行為者)に認定することをいかに説明しうるか」という問題である<sup>11)</sup>。ある存在者の二性格について超越論的区別を対応させるにしても、カントがアンチノミーとして取り上げた矛盾からして、二性格の両立には相当な困難が伴うことは避けられない。しかしながら、方法論的二側面解釈は従来型の、「二観点的」とも呼ぶことのできる形而上学的二側面解釈が、あくまで存在論的に現象と物自体の区別を考えていたこと、すなわち二性格を存在論的条件としてもつ同一のある存在者が「経験的には自然の因果に従い、また非経験的には云々する」というのと反対に、これらの二性格は認知的条件として想定されるから、その同一のある存在者の行為者性として、ひいては理性的存在者一般に遍く共通する理性的行為者性としてこれを捉えている。したがって、アリソンの二側面解釈に従えば、カントの二性格に関する主張は、理性的存在者の活動を基礎づける理性的行為者性に考えられる二類型の説明として捉えられ

る。言い換えれば、経験的性格は自然の因果に従う行為者性の説明のモデルであり、叡知的性格は悟性の自発性として解された人間の自由による因果を説明する行為者性のモデルとして了解される。アリソンの理解に従うならば、ある行為における行為者の自発性は、カントの認識論で素描された理論的な悟性の使用を実践面に置き換えたものであり、アリソンは行為者性としての叡知的性格が備える自発性を「客観的な(間主観的に妥当する)理性的規範を土台にして行為するように自己を決定しうる能力」であり、「この規範に照らして、傾向性や欲望を行為のための十分あり理由として認める(または拒む)ことができる能力」と特徴づけている。

したがって、叡知的性格が示す行為者性のモデルは、意図的な行為を因果的な諸条件ではなくて、無時間的な自発性による自身の判断に基づかせ、説明するモデルである。このような自発性の概念が、カントの主張に通底しているという見方を、アリソンは、「取り込みテーゼ (Incorporation Thesis)」と呼ぶ。取り込みテーゼは、直接には『宗教論』の「選択意志が動機によって行為へと決定されうるのは、ただ人がその動機をみずからの格率へと取り込んだかぎり(それを自らの普遍的な規則にして、その規則にしたがって行動しようとするかぎり)のことにすぎないのである」(Rel. 6: 23-24)<sup>12)</sup>という主張を指すが、アリソンはこれをカントの決定的な主張と捉えている。アリソンによると、感性的な欲求である傾向性は直接、選択意志にはたらきかけるのではなく、主観的な行為の規則である格率 (Maxime) に取り込まれることで間接的に意志にはたらきかける、すなわち統覚である〈私 (ich)〉はそのように感性的な欲求を受けとるのである。さらにいえば、「取り込み」や「受けとり」は統覚の活動性に含まれることは明らかだから、〈われ思う〉(カント的には〈私は判断する〉)と同様に、概念的には把握されうるが経験されえない。いいかえれば、「私は自分が判断しているのを観察することができない」ことと同じく「私は自分が決定しているのを観察することができない」<sup>13)</sup>。この意味で意図的行為は、カントの言葉づかいに則って言えば、まさしくたんに叡知的なものとし

て捉えられ、それゆえに理性的行為者性には経験的側面と叡知的側面が前提されなければならない。さらに、取り込みテーゼが前提する性格の二側面解釈では、唯物論的な立場から頻繁に向けられる「叡知的性格(物自体に関する主張)は経験的にはまったく無価値である」という批判は、アリソン説では現象と物自体の区別を行為者性についてのモデルと解しているから、そもそも経験的な性格と競合するものではない。また、カントの倫理学が現代でも価値ある主張として取り扱われるところでもあるが、叡知的性格の概念は「自分自身と他者を理性的行為者として捉えるための本質的な構成要素であり」、すなわち人間を理性的存在者として考えるカントの哲学は「それゆえに責任の認定および理性的な正当化の文脈において機能する」のである<sup>14)</sup>。

## アリソン説の受容について

アリソンが示したカント解釈の二つの指針は、まず英語圏の研究者を中心に広まることとなる。彼の解釈は基本的にカントを好意的に捉える研究者にとっては親しみやすいものであり、超越論的観念論の区別を行為者性の二側面に言及したものと読み替える性格論の区別は、カントを現代的に理解する上で無視することのできない解釈法になったと言えよう。

ところが、アリソン説の初期段階での受容はそれほど芳しいものではなかった。日本国内でアリソンについて言及した記述のうち古いもの、たとえば、1997年の『カント事典』における「英語圏のカント研究」の項では、戦後のカント研究者が列記された後ポール・ガイヤーとアリソンの二名が当代における新進気鋭のカント学者として名前があげられている。しかし、アリソンに対する評価は「主著である『カントの超越論的観念論：解釈と擁護』(Kant's transcendental idealism: an interpretation and defense)からも、そのタイトルにもかかわらず、カントの観念論者としての評価がなされていないことは何とも皮肉である」<sup>15)</sup>と酷評されている。

また、メタ倫理学の大家であるサイモン・ブラックバーンは新ヒューム主義的な動機づけの観点から、1998年の著作において、欲望という明らかに他律的な動機をも自律的に行為の格率に取り入れられるというカント主義の立場を拒否し、アリソンの取り込みテーゼを相当に意識していたことがうかがえる<sup>16)</sup>。だが、その後の「カントの唯物論反駁」と『カントの自由論』は、戦後の最大のカント批判者であるP.F.ストローソンが『純粹理性批判』に対決的だったのと反対に、アリソンがカントに好意的に、したがって思想史的な文脈や現代的な問題設定(たとえばメタ倫理学の用語や議論)を踏まえ、ともかく哲学的に擁護可能な仕方で論証を行ったことが評価されている<sup>17)</sup>。具体的には、「他律的な行為は自由ではない」というカントの主張が、経験的次元における責任概念を放棄するものではなく、行為者の内省に帰責の要件を求める理論として再構成されることとなったのである。

取り込みテーゼは、行為を引き起こすのに十分な動因を余さず想定しており、傾向性のうち、とりわけ行為者の心情(言い換えれば、現代における一般的な意味での心理学的意識)がいかに関係するかの、調停的な仕方で説明している。シャピローによる報告では、アリソンが強調する、取り込みテーゼは「カントが理性的行為者性について言及しなければならないこと、すべてについてその根底に事実として横たわっている」という主張は1990年代を代表するカント主義者が挙げて同意するところであり、カントの主張として正当なものと考えられている<sup>18)</sup>。

アリソン説に対する批判として留意すべき点は、取り込みテーゼはアリソンが見出したものではなく、彼が最初にそう名付けたものの、この種の理解の仕方は相当に以前からある解釈法であり、アリソンと同時期の研究者にしてもコースガードとガイヤーが同種の解釈を採用していることである<sup>19)</sup>。ウィリアムソンによれば、取り込みテーゼは『第一批判』と『宗教論』を結びつけることで、カントの自由に関する主張を理性的行為者性に関する理論として好意的に再解釈する一方で、アリ

ソンら三者はこのテーゼをカントの道德哲学を解釈するために扱っている。いいかえれば、ウィリアムソンによる批判の要点は、取り込みテーゼが『宗教論』の一節だけを引き合いに出し、理性的行為者性の理論と自律の概念を結びつけているが、他の道德に関する著作と同様に傾向性が自由を阻害するという考えを『宗教論』が含んでいる」ことである<sup>20)</sup>。ウィリアムソンとシャピローがアリソンを批判する論文で言及したところだが、アリソンの方法論的二側面解釈と取り込みテーゼの相補性は論の循環を生み出している。しかし、シャピローも認める<sup>21)</sup>ように取り込みテーゼは、たしかに1990年代のカント主義の哲学者に受け入れられ、それどころかこの種の理解はアリソンの提唱よりもはるかに以前からも認められていたのである。

方法論的二側面解釈 (methodological two-aspect interpretation) はヘンリー・アリソンの著作(特に『カントの超越論的観念論: 解釈と擁護』第一版、1983[…])のおかげをもって、現在きわめて影響力のある解釈オプションとなるに至った。今日カントの超越論的観念論について論じようと思えば、この解釈オプションとの対決は不可避である。しかしながら、その有名さ並びに重要性にもかかわらず、それが実のところどのような見解をカントの超越論的観念論に帰そうとするものであるのかは決して明らかではない。とりわけわかりにくいのは、それが伝統的な解釈オプションの一つである形而上学的二側面解釈とどのように区別されるのか、という点である<sup>22)</sup>。

千葉による報告では、アリソンの示す方法論的解釈は強大な影響力を持つ一方で、実のところ形而上学的二側面解釈とどのように区別されるべきか、アリソンの賛同者にとっても批判者にとっても定まっていない。すなわち、アリソンが二つの著作で繰り返すように、方法論的二側面解釈は反「二世界解釈」と反「形而上学的二側

面解釈」で成り立っているが、形而上学的二側面解釈をとらない、つまり同じ対象の二観点として現象と物自体を区別するなら、アリソンの思惑に反して後者を認識的な仮象とみなすことが避けられないのである。千葉の見解にしたがうならば、本邦における先述の評価通り、アリソンはカントの超越論的観念(超越論的実在論)を損なっているといえるだろう。いやそれどころか、二側面解釈への論難が正当なものであるなら、論証の相互性ゆえに取り込みテーゼにも修正が必要になり、カントの諸著作を一貫したものとみるアリソンの戦略は大幅な方向転換を余儀なくされるのである。

## おわりに

アリソンによれば、『純粹理性批判』の超越論的観念論を理解する鍵は方法論的二側面解釈の理解にあり、これによって性格論として対比される行為者性のモデルが導かれる。そして、超越論的観念論の難解さゆえに絶えず批判的となる叡知的性格は「取り込みテーゼ」によって正当に、われわれ人間に帰されるべき行為者性の要件を備えていることが明らかになる。さらに、アリソン説は『宗教論』の一節にも現れる取り込みテーゼの主張を取り上げることで、カントの著作を一貫した思想のもとで展開されたものと好意的に解釈することを可能にしている。「カントの唯物論反駁」で強調されるように、統覚概念と悟性の自発性に関する主張は唯物論的、決定論的に解釈することが不可能な見解である。この主張は、『カントの自由論』においても思想史的視点から、すなわちカントがライブニッツやヒュームをはじめとする先達に倣って自由の両立論的定義を行わなかったかという視点から、妥当な仕方で証明している。これはカントが自由を、たんに第三アンチノミーの定立の観点に基づいて自然と両立可能な概念として定義したのではなく、理性にとって互いに均衡する主張として理解していたことから、定立で想定される自由はたんに自然に矛盾しない代物ではなく、明らかに非決定論的なすなわち超越論的自由を含

むものとして定義したことによって裏打ちされる。カントを反唯物論的に解釈し、経験的な統覚と超越論的(無時間的)統覚の区別(A106-107)を人間に応用したものと捉え、「理性的行為者性の理論」として再構築するアリソンの解釈は、現代のカント主義者の要求に適っており、カントを好意的に捉える上でも、批判する上でも無視することのできない重要な見解のうちに数え入れられる。

ところが、一連のアリソン式解釈は、カントに向けられる古典的批判を快刀乱麻を断つが如く解決してゆくが、本稿で取り上げたウィリアムソン、千葉、シャピローの批判によれば、それらの見解が一体どれだけカントに帰せられるかは定かではない。さらに、千葉の指摘するところでは、方法論的二側面解釈が、現象と物自体の区別を存在論的な区別と捉える、すなわち従来からある形而上学的二側面解釈と如何に区別されるか不明であり、この点はアリソン説の賛同者、批判者にしばしば混同され二次的な論争を起こしている<sup>23)</sup>。遺憾ながら、本稿ではこの論点を追求することができず、一解釈法の敷衍に留まってしまった。今後の研究では、思想家の論考のたんなる敷衍にとどまらない、論説の展開に挑みたいと思う。

## 註

- 1) カント、「新しい純粹理性批判は古い批判によってすべて無用にされるはずだ」という発見について」(1790)、『カント全集 12巻』、128-129頁。
- 2) 前掲書、129-130頁。
- 3) 桐原(2015)、56頁。
- 4) 同上。
- 5) Allison, Kant's Refutation of Materialism, *The Monist* 72(2), 1989, p. 190.
- 6) Ibid.
- 7) Allison (1989), p. 190.
- 8) カント、『人倫の形而上学の基礎づけ』(1785)、『カント全集 7巻』、103頁。

- 9) Allison (1989), p. 197.
- 10) Ibid.
- 11) アリソン、城戸淳訳、『カントの自由論』(2017)、8-9 頁、52-98 頁。
- 12) カント、『宗教論』(1796)、『カント全集 9 巻』、39 頁。
- 13) Allison(1989), p190. アリソン、城戸淳訳(2017)、75 頁。
- 14) アリソン、城戸淳訳(2017)、10 頁。
- 15) 有福孝岳、坂部恵編、『縮刷版カント事典』、光文堂、2014 年、34 頁。項目は R.P.ウォルフ、伏原理夫による。
- 16) Blackburn., Ruling Passions: A defence of a NeoHumean theory of reasons and moral motivation, Oxford University Press, 1998, Clarendon Press; Revised ed. (January, 2001) pp. 250–255.
- 17) Schapiro (2011).アリソン、城戸淳訳(2017)、481 頁。
- 18) アリソン、城戸淳訳(2017)、74 頁。
- 19) Williamson (2008), p. 66
- 20) Ibid.
- 21) Schapiro (2011), p. 147
- 22) 千葉清史(2012)、149 頁。
- 23) 前掲書、149-150 頁。

## 凡例

本稿ではカント研究の先例に倣い、『純粋理性批判』の第一版を A 版、第二版を B 版と区別し、カントの著作を参照する場合、引用文の後に以下()内に記す著作の省略記号を用いてアカデミー版カント全集における巻数と頁数を記す。(『純粋理性批判』(A/B)、『プロレゴメナ』(P)、『人倫の形而上学の基礎づけ』(Gr)、『たんなる理性の限界内の宗教』(Rel))



また文体と術語の整合性を確保するために、引用回数の最も多い『純粋理性批判』は2014年のSuhrkamp版を底本に、参考に示した邦訳を参照しながら筆者の訳したものを、他の著作の引用は理想社版のカント全集の邦訳による。『純粋理性批判』以外の著作から引用した場合は文末に注を付け、理想社版の全集における邦訳の引用頁数を示した。なお、引用文中で筆者が補った箇所は[]内に示し、省略した箇所は[]内に三点リーダーで示した。

## 参考文献

- Allison, Henry E., *Kant's transcendental idealism: an interpretation and defense*, Yale University Press (1983); Revised ed. March, 2004.
- Kant's Refutation of Materialism, *The Monist* 72 (2) :pp. 190-208, 1989.
- *Kant's theory of freedom*, Cambridge University Press, 1990. [邦訳：城戸淳訳、『カントの自由論』法政大学出版局、2017年]
- Kant, Immanuel., *Kritik der reinen Vernunft*, Auflage I: 1781, II: 1787. 『純粋理性批判』 [邦訳：篠田英雄訳(1961)、岩波文庫版上・中・下巻、岩波書店、上・中巻2008年、下巻2011年。高峯一愚訳、『世界の大思想10巻』、河出書房新社、1965年。原佑訳、『カント全集4・5・6巻』、理想社、1988年。熊野純彦訳、作品社、2012年。]
- *Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, 1783. 『プロレゴメナ』 [邦訳：湯本和男訳、『カント全集6巻』、理想社、1988年。]
- *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, 1785. 『人倫の形而上学の基礎づけ』 (『基礎づけ』) [邦訳：深作守文、『カント全集7巻』、理想社、1988年。]
- *Über eine Entdeckung, nach der alle neue Kritik der reinen Vernunft durch eine ältere entbehrlich gemacht werden soll*, 1990. 「新しい純粋理性批判は古い批判によってすべて無用にされるはずだという発見について」 [邦訳：門

脇卓爾訳、「純粹理性批判の無用論」『カント全集 12 巻』、理想社、1988 年。]

——*Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, 1793. 『たんなる理性の限界内の宗教』（『宗教論』）〔邦訳：飯島宗享、宇都宮芳明、『カント全集 9 巻』、理想社、1987 年〕

——*Die Metaphysik der Sitten*, 1797. 『人倫の形而上学』

桐原隆弘、「カントにおける「判断」論と学の基礎づけ(上)」、『下関市立大学論集』第 59 巻第 1 号、下関立大学会、45-73 頁、2015 年。

Williamson, Diane., The Merits and Deficiencies of Kant's "Incorporation Thesis" as an Interpretation and a Revision, *Rethinking Kant Volume I*, Cambridge Scholars Publishing: pp. 68-67, 2008.

Schapiro, Tamar., Foregrounding Desire: A Defense of Kant's Incorporation Thesis, *The Journal of Ethics* 15 (3): pp. 147-167, 2011.

千葉清史、「ヘンリー・アリソンの方法論的二側面解釈」、日本カント協会編『日本カント研究 13 『カントと形而上学』』理想社、149-164 頁、2012 年。

千葉健、「カント倫理学において意志の弱さはいかにして可能か」、『哲学・思想論叢』36 巻、筑波大学哲学・思想学会、105-117 頁、2018 年。